

25.

いまや石油危機という困難な時期に直面しています。

いま静かに考えると石油の恩恵に私らは慣れすぎてきたということでしょう。便利なものに走りすぎて物を大切に扱わなかったのです。大切にせねばならないという気はあっても、世間の大きな波に取り残されて約立たぬ人間になる恐れがありました。

ところが今になって私らは大自然というものの本来の姿を見出したのではないかと……とそんな感じがします。人工のために忘れかけた自然、その秩序、その生活などが再びよみがえりを見せてきたようです。

私らは便利さを奪われて当座はうろたえるでしょうが、ありのままの自然がじかに私らに触れあう、そこに虚偽なき心の喜びがあると思います。

歳時記に集められた季語を見ると、自然という悠久な不思議なものをそこに感じとれる。俳句とはその自然と自己との触れ合いであり、挨拶でもあるのであります。

26.

芭蕉の遺した言葉を紹介しておこう。

風雅には万代不易と一時の変化とがある。この二つの究まる根本は結局一つである、といている。つまり風雅の誠は一つだと決めているのである。

理屈をのべる事は面白くないが、自然という対象は四時常態で昔も今もあはれだと感心する歌が多いので、こういうものを不易と名づける。だがそればかりやれば古人の涎をなめるのと同様でつまらないものである。

自然という対象は気をつけて接すると千変万化してとどまるところがない。その変化する驚きに敏感でなくてはならない。芭蕉のいう風雅の誠とは、心をとぎすまして自然に体当たりをすれば変化を発見して直ちに句に作すこと、すなわち誠の俳諧だと説かれている。

四時変化する中に一貫した四時常態が存在する道理を認めるのである。

私たちが常に俳句に新みがなければならぬ、一歩でも新しく前進する必要がある、と唱えるのは芭蕉の風雅の誠の教えに従うためでもある。

27.

「三冊子」という本に芭蕉は、松のことは松に習えといいそして私意を離れることが大事であると訓えている。

松を松らしく描くためには自分が松になった気分で描くのであって、松をこういう形に作り直してみようと勝手に変えたりしては不可ない。それは私意を入れることになり松に習っていないのだとの教訓だと思う。

この道理はよく分かるのである。けれどもも初心の時は懸命になって対象を見つめるのであるが、少し慣れてくると自分の考えが恣（ほしいまま）に加わる。自分の考えは大抵はよく見えても底が浅く、忽ち作り事であることがばれて賤（あや）しさが見えるのだが、気がつかないのである。こうなると対象を見つめることをおろそかにして、ただただ自分の勝手な考えをふりまわす、つまり私意に溺れる。

その私意をつっ離して一途に自然の姿を自分の心に融かし込むほど辛抱して見つめる。そうすれば、自分は自然と一如になっている気分がして何ともいえぬたのしい陶醉状態に入るに違いない。

われわれの実作の上にこの苦しみと楽しみとがいつもまつわりつづけている。